

父島を訪ねて

私は九年前、東京平和委員会や安保破棄東京実行委員会の代表と共に父島を訪問しました。

その目的は、米軍が小笠原の父島に核兵器を持ち込んだといわれる場所の調査、住民への聞き取り調査等にありました。

米公文書が示す核持込み

アメリカ政府の解禁された公文書によれば、父島への核兵器の持込みは、56年2月に「爆弾」が持ち込まれ、56年3～5月に撤去、「レギュラス」が56年3～5月に持ち込まれ、64年10月12日に撤去、「タロス」が64年10月12月に持ち込まれ、65年12月に撤去したとされています。また硫

黄島には、「非核爆弾」が

56年2月に持ち込まれ、66年6月に撤去、「爆弾」は56年9月に持ち込まれ、59年9月12日に撤去されたと記録されています。

父島に核兵器が持ち込まれ、貯蔵されたのは戦争中に日本軍が造った弾薬庫だと言われています。

私たちは、父島の清瀬と言っているところにある大神山の中腹をくりぬいて構築された弾薬庫(写真)を見ました。

住民の生々しい証言

同時に私たちは、いち早く米軍に父島に帰島するのとが許されていた欧米系の住民ひとりだった池田実さんから当時のお話を聞くことが出来ました。当時弾薬庫入口近くに住んでいた

池田さんは「米軍が父島に駐屯しはじめたのは55年ころだった」「確か64年頃だったと思うが、ある日マリンが入ってきた」「副官が家にきて『今日お前

ど2階にあがるな』と言って帰っていった。そしたら上がりたくなるのが人間、でっかいトラックで何か運んできました。ステータラックといって長いトラックだったが、それでも載せていたものは後ろに1メートル位はみ出していた。そのものは港に入った潜水艦(ボラリス)の上がパカッと割れて、クレーンで吊り上げられていましたよ、でかい気球を上げていましたね」「警戒はとても厳重で、投光器で明るくしていた」と3時間交代で警戒していた」等と話してくれまし

た。

また、元村長だった安藤光一さんは「父島に核兵器があったことは、噂としては聞いていた」と話してくれました。

私たちが訪問した当時の村長さんだった宮澤昭一さんは「核密約」については「新聞などを通じて知っていた。国会の外務委員を通じて外務省に問い合わせたが、そうしたものは存在していないということだった」と語っていました。

核持込み影響与えなかった事前協議制

ここで私が言いたいことは、日米核密約の根幹となっている60年1月6日にマツカーサー大使と藤山外相(当時)が署名した討論記録(秘密協定)のなかで『装備における重要な変更は、核兵器及び中・長距離ミサイルの日本への持込み(イントロダクション)並びにそれらの兵器のための基地の建設を意味すると



核密約の公表と非核三原則法制化を被爆国政府としてのイニシアチブを

非核三原則は国是であるとしながら、その裏で「日米核密約」により、実際には空文化させてきた自公政権の犯罪的な政治に、私はあらためて激しい憤りを覚えると共に、日本政府がこれらの「密約」を「早く公表・破棄し、非核三原則を法制化し、被爆国の政府として核兵器廃絶のため国際協議開始と国際条約の合意のため大いにイニシアチブを發揮することを強く求めるものです。(小見出しは編集部)

「日米核密約」のもとでの東京(下)

東京原水協代表理事

柴田 桂馬

の基地の建設を意味すると

並びにそれらの兵器のための基地の建設を意味すると